

# 大森莊蔵の「立ち現われ」とウイトゲンシュタインの「アスペクト知覚」について

石田 恵理

はじめに

本稿のねらいは、ともにわれわれの使用する言語の背景に、個々の使用の場面を超えた普遍的な「意味」の存在を定立することを否定した大森莊蔵とウイトゲンシュタインが、知覚についてとった立場を比較することである。なぜなら、両者には言語の意味についての問題と知覚の問題を関連付けて考察したという点においても共通性があり、これらの問題についての捉え方を比較することで、ウイトゲンシュタインの考えに対して再解釈を行うことが可能になるのではないかと考えられるからである。そのため、まず、大森がわれわれの言語行為を身体的行動の一種として捉え、そのことからどのようにわれわれの知覚についての「立ち現われ」の着想に至ったかを概観し、次にウイトゲンシュタインの言語の意味と知覚についての見解が明ら

かにされている「アスペクト知覚」に関する問題はどのようなものであるか簡潔に述べ、さらに、この問題についてのウイトゲンシュタインの見解に対する一つの解釈である、野矢茂樹氏の立場を紹介したい。続いて、大森とウイトゲンシュタインの見解との共通性を検討することで、野矢氏とは異なる解釈の可能性を探りたい。最後に、大森とウイトゲンシュタインの知覚についての見解の重なりから引き出された解釈が、ウイトゲンシュタインが言語の意味の考察においてとったとされる、われわれの言語活動の外に規則を実体的に再構成しないという立場と整合性を持つことを確認し、結論としたい。

## 一 大森莊蔵の「立ち現われ」

大森は、われわれが抱いている、ある一つの語、あるいは発言が、それが使用される状況にかかわらず、一つの不変の意味

を持つという考えについて以下のように述べている。

「水を下さい。」この願いの働き方は、話し手が誰であり、聞き手が誰であり、場所がどこであり(居間、台所、庭先、オフィス、レストラン、プール、戦場、火事場、等々)時(例えば昼か深夜か)と天候(暑い日、寒い日、嵐の日)、水の在り場所(他人の家、井戸、川、水筒等)が異なることに異なることは明らかであろう。だが、……それは同一不変の「水を下さい」という「意味」が様々な状況にあつて、様々に使われ、様々に働くだけではないか、と。なるほど、同一不変の一つの小刀が、紙や爪や果物や肉をこれまた様々な切り方で切り、様々な突き方で突く、と言うことは言えよう。しかし、同一不変の小刀に当る、同一不変の「意味」とはどんな「意味」なのだろうか。小刀の場合には、それが使われず、働いていないときにも、明確な形を持ち明確な重みをもって机の上にある。だが、使われていない、働いていない、「水を下さい」という「意味」とはどんな姿で在るのだろうか。それは辞書の中に「しまいこまれて」在るのだろうか。

ここでは、われわれが様々な状況で用いる、「水を下さい」という発言の背景に存在するとわれわれが捉える「意味」が、様々な物を切る小刀の働きと対比されている。そして、小刀の場合にはそれは使用されていないときにも物として存在していると言うことができるが、そのあり方をそのまま発言の「意味」

に対しても適用できるのかと問われている。

さらに、以下の箇所では、われわれが抱きがちな同一の表現は、状況がいかに変化しようとも、一つの固定的な「意味」を持つ、という見解に対する、大森自身の立場が述べられている。

しかし、一つの国語を話せるということは、その国語の表現の「意味」を了解していることであり、同一の表現の「意味」は状況が無限に変わろうとも、一つの「意味」しか持っていないのではないか。このように問われよう。

そうではない。一つの国語を話せるということは、無限に変化する状況の中で、これまた無限に変化する働きをしようとするとき、どのような発声動作をすればよいかを習得していることである。……同一不変の「水を下さい」の「意味」なるものもないのである。様々な状況において「ミズオクダサイ」という発声動作もまた無限に変る。強い命令口調、遠慮がちな、哀願的な、明るい、暗い、きつい、間のびした、明晰な、眩くような、断固とした、弱々しい、といった具合に。それらは音声的にも千変万化していること、一つの楽譜に従った演奏が千変万化するのと同じである。それに応じて、その発声動作の働き方、その働きの結果、そして結果(水を手に入れる、拒まれる等の)起り方もまた千変万化なのである。

上記の箇所から読み取れることとして、大森にとっては、言語の習得とは、一つ一つの表現に存在する「意味」を学習し理解

していくことではなく、様々に変化する状況の中で、どのような発声動作をすれば良いか、つまり、様々な働きをする表現を実際に発することを学ぶことであり、一つの表現に対して存在する同一不変の「意味」は存在しない、と捉えられていたと言える。

大森は、「水が欲しいとき、どういう声や文字を発し書けばよいか、という指示があり、それを習得していること」が「水を下さい」という表現の「意味」を知っていることであると明確に述べている。それでは、この言語の意味についての捉え方を、大森がどのようにわれわれの知覚についての捉え方に拡張し、「立ち現われ」という着想に至ったか、以下で概略を述べたい。

例えば、われわれがあるものを思い浮かべるとき、われわれが実際にそのものを目の前にしていないとすれば、それを思い浮かべるための媒介が何か必要とされるのだろうか。大森は以下のように自らの立場を述べている。

今東京にいるわたしが、誰かの言葉を聞いてか、あるいはおのずととか、とにかく京都の賀茂川を「思い浮かべた」としよう。二元論的構図の下では、その「思い浮かべられた」賀茂川は、京都を貫いて流れている「対象」としての賀茂川の「表象」なのである。……しかし、ここで別の構図をえがいてみよう。本物の賀茂川は二つの仕方であつたにじかに「立ち現れる」。「表象」なるものを「通して」で

はなくじかにである。一つの立ち現れ方は、知覚的に立ち現れる仕方である。賀茂川がその立ち現れ方をするのはわたしが賀茂のほとりに居り、肉眼で眺め、あるいは手を入れてその水に触れる場合である。それに対して今一つの立ち現れ方は、今のように私が遠く離れて賀茂を「思う」ときの立ち現れ方で、その場合は見たり触れたりできない、つまり知覚できない。知覚的立ち現れに対して、この思い的立ち現われの根本的性格は今述べたように、知覚できない、知覚していないと言う所にある。

ここで大森は、遠く離れた場所での「思い」浮かべたとき、われわれにありありと浮かんでくる賀茂川の姿と、眼前にし水に手を入れたり、知覚することができるときにわれわれに現われてくる賀茂川の姿を、区別せずにどちらも「立ち現われ」として捉える別の構図を提案している。そして、この場合に問題となるのは、眼前にしている賀茂川に対して持つ「知覚的立ち現われ」と異なり、遠く離れた場所で「思い」浮かべるときに持つ、賀茂川の「思い的立ち現われ」についてはわれわれは知覚していないという点であると述べている。次の箇所でも、知覚についての「対象」と「表象」の二元論的構図にわれわれがからめとられてしまう原因が、この点にあると指摘している。

二元論の誘惑の発端の一つは、この「思い」が知覚できない、という所にあると思う。眼で見なければその姿がわからず、手で触れねばその冷たさがわからぬ種類の事物であ

る賀茂川を、今見ることも触れることもできない所にいるわたしに何らかの形で現前させるためには、ただ何かの仕方での本物の写しによる以外はない、と考えるのである。そしてその写し、またはそれに類する何ものかに「表象」の名を与え、それを認知したのである。<sup>(6)</sup>

つまり、知覚できないものを思い浮かべるにあたって、われわれは実物に近い何かに頼る過程を必要とし、それはここで「表象」と呼ばれる、実物の写しに頼るほかないということだという考えにわれわれが陥っていると捉えられていると言えらる。ここで述べた「表象」を求める素朴な二元論からさらに進んで、「表象」が「知覚的立ち現われ」について求められる場合についても、大森は述べている。それは、哲学者が知覚においても、知覚としてありありと現われていること、いわば「知覚像」と、実際のものの姿、いわば「対象」を区別している場合である<sup>(7)</sup>とされる。大森によれば、この地点に至ると、二元論的構図は奇妙な図柄を提示するようになる。<sup>(8)</sup>なぜなら、「思いの立ち現われ」も「知覚的立ち現われ」もどちらも「表象」に過ぎないため、「対象」はそれらすべての「表象」の向こうに追いやられ、本物とその写しという「対象」と「表象」の関係を示したはずの二元論的構図は自ら焦点のぼやけたものにならざるを得ないと考えられるからである。<sup>(9)</sup>

## 二 ウイトゲンシュタインの「アスペクト知覚」

一方で、それを巡ってウイトゲンシュタインの言語の意味と知覚についての考察がなされる、「アスペクト知覚」という問題は、『哲学探究』第Ⅱ部において登場する。「アスペクト」は、いわば「見方」に関する概念であり、〈……として見る〉という形で捉えられている。よく知られているのは、ウイトゲンシュタインが「アスペクトのひらめき」と呼んだ場合で、これは一つの図柄に対してわれわれが一つ以上の見え方を持つ場合に関係する言い回しである。<sup>(10)</sup>『哲学探究』第Ⅱ部のxi章においては、ウサギにもアヒルにも見ることができるとされる絵（以下では、ウサギアヒルの図として言及）が登場する。この絵に関して、私がウサギの絵として見ていたが、突然アヒルとしても見ることができると気づいたとき、「アスペクトのひらめき」が生じたと言われる。そして、この絵を、通常われわれはウサギとしてもアヒルとしても見ることが可能であり、だが図柄自体は変わらないままであることを理解していると考えられる。<sup>(11)</sup>ここでウイトゲンシュタインが考察しているのは、われわれのように「アスペクトのひらめき」を体験できない人の場合であり、『哲学探究』においては、このような人は「アスペクト盲」と呼ばれる。<sup>(12)</sup>さらに、ウイトゲンシュタインはこの「アスペクト盲」の問題を言語の意味についての考察へ反映させようとしていた。<sup>(13)</sup>

野矢氏の解釈においては、ワイトゲンシュタインは、「規則に従う」という場面においてアスペクトという概念を論じており、ワイトゲンシュタインはこの概念によつて、知覚についてのみならず、言語使用についても考察しようとしていたとされている。そして、「アスペクト旨」に対応するものとして提出した、ある語の意味の経験をする能力が欠如している者（「意味盲」と呼ばれる）についてのワイトゲンシュタインの記述は交錯しており、ワイトゲンシュタインは、「意味盲はたいしたものを見失わない」とも述べているが、野矢氏自身の見解として意味盲は規範性を失っていると結論付けることができると思われる。

野矢氏によれば、ワイトゲンシュタインが〈…として見る〉というアスペクト知覚を取り上げるのは、あくまでも通常の知覚である〈…を見る〉との対照においてである。つまり、われわれが日常でしている知覚は、〈…として見る〉ではなく、ただの〈…を見る〉がほとんどであり、ワイトゲンシュタインの目的は、通常の知覚と対比して、〈…として見る〉という言葉の含意は何であるのか、を問うことであつたとされる。

日常の大部分において、われわれは実際そのようにものを見ていないだろうか。私は机を見、机の上にある煙草を見て、煙草を取る。そのとき私はけつしてそれを机として、あるいは煙草として見たりはしない。<sup>(20)</sup>

右の箇所から読み取れるように、野矢氏は、まず〈…として見

る〉というアスペクト知覚を伴わない見方がわれわれの日常生活において大部分を占めていることを述べ、例えば「われわれはすべてを何かとして見るのである」とする主張は誤りであると指摘している。野矢氏は、われわれの日常生活において大部分を占めている、〈…として〉ではなく、単に机を見ている、という見方に対して、〈…として見る〉というアスペクト知覚は、「把握の仕方の把握」<sup>(22)</sup>「いかなる見方で見ているかの表明」<sup>(23)</sup>を含んだ見方であると述べている。

私がアスペクトのひらめきにおいて知覚するのは、「色や形といった」対象の一つの属性ではなく、それと他の対象との内的関係なのである。<sup>(24)</sup>

そして、上記のワイトゲンシュタインの記述から、野矢氏は、アスペクト知覚を「見方の把握」<sup>(25)</sup>として、すなわち「そのものの属する内的連関性をなんらかのかたちで主題化するような体験」<sup>(26)</sup>として捉えている。つまり、野矢氏の考察においては、アスペクト知覚は、他の物との関係においてそれを何として見るか、という見方を含んだ知覚であり、この解釈の言語使用の場面への適用が検討されていくこととなる。ワイトゲンシュタインのアスペクト知覚の問題が、言語使用の場面に拡張されていくとき、そこに見られるのは、日常の大部分を占める、われわれが行っている「なめらかなコミュニケーションのさなかにある、ひとつの記号がさまざまな内的連関性の中に置かれるなど」ということはけつして意識されていない<sup>(27)</sup>という事実であ

り、意味盲の人は、例えば、同音異義語の区別ができない人として表われてくるということであるとされる<sup>28)</sup>。

前述のように、アスペクト盲でないわれわれは、それをウサギとしてもアヒルとしても見ることができるといふ見え方の変化の可能性を知った上で、一つの図柄に対して語ることでできる人であった。このことは、二つの見え方が存在しているが、そこにあるのは一つの同一の図柄であるということを知っているということであり、それが、〈…として見る〉の表明を含む見方であるアスペクト知覚と、それとは異なる〈…を見る〉という通常の知覚の両方をするのが可能であるということに重ねられることとなる。同様に、意味盲でないということは、「まつ」という一つの音であっても、樹木の「松」が意味されていることも、状態の一つである「待つ」が意味されていることも可能であることを理解しているということになる<sup>29)</sup>。つまり、アスペクト盲や意味盲でないということとは、通常の知覚経験とそれに類する意味上の経験、アスペクト知覚とそれに類する意味上の経験の両方をするのが可能であるということだと理解することができる。野矢氏はこのことを、「通常の言語使用、つまりよどみのないコミュニケーション等の場面で為されるさまざまな言語ゲーム」と「端的な言語使用のレベルから身を離し、いくつかの選択肢を前にして吟味し、説明するといった場面では為される諸ゲーム<sup>30)</sup>」の二つの言語ゲームのタイプをウイトゲンシュタインが区別していた、という形で捉えている。

そして、碁盤の上の一つ黒石を置くということが、ただ文字通りのそういう行為としてだけ見られることも、また「碁を打つ」としても見られることになぞらえて、言語使用の場面においても、「かくかくの音を発する」と「言葉を話す」という、単なる「行動」と規則に則った「実践」との区別が存在していると述べている<sup>31)</sup>。重要なのは、単なる行為として描写された「行動」には規則が存在していないという点であり、このことから意味盲の人には「規範性」、「規則に従っている」ということが欠けているのだという結論が引き出される<sup>32)</sup>。

確かに、ウイトゲンシュタインの「アスペクト知覚」の問題は、われわれのように、通常の知覚もアスペクト知覚も持つことのできる人と、〈…として見る〉ということができないアスペクト盲の人との違いに端緒を持つ考察である。ウイトゲンシュタイン自身も、例えば、習慣や教育によって習得されることを通じて、習得した人にはある種の見方を許す「描法<sup>33)</sup>」というものに注目していたと指摘することができる。だが、アスペクト盲や意味盲の人に対しては、何を欠いていると言うことが可能なのか、それは、実際に「規範性」、「規則に従っている」とであると云えるのだろうか。

### 三 ウイトゲンシュタインと大森荘蔵の見解の共通性

ここで大森の見解を参照することで、ウイトゲンシュタイン

の「アスペクト知覚」の問題に対して、野矢氏とは別の方向の解釈の可能性が生まれると考えられる。大森は、何かについて空想するときの「立ち現われ」についても考察を行っていた。

すなわち、デカルトにとつて、夢の事物であれキマイラであれ、また眼前に見えるランプであれ、「それ自身において見られ、他のものと関係させられないならば」、それらの立ち現われは最も強い意味で「真」なのである。……したがって、それらの立ち現われは最も原初的な意味で「存在」したのである。……大切なことは、「実在するもの」も「実在しないもの」もその立ち現われにおいては、「それ自身において見られ」る限りは、同等の資格で「存在する」ということである。

上記の引用から理解できるように、大森は空想しているものについてわれわれが持つのも「立ち現われ」であり、他の事物と関連させずそれ自身において見られる限りは、それは実在しているものについての「立ち現われ」と、何ら異なることのない「立ち現われ」であると捉えていた。

『哲学探究』において、ウイトゲンシュタインがとっていたのは、以下の箇所から理解できるように、言語の意味はその使用であるという見解であったとされる。

私が誰かを買物にやる。彼に「赤いリング五つ」という記号の書いてある紙片を渡す。彼がその紙片を商人のところに持って行くと、商人は「リング」という記号のついて

いる引き出しをあげ、次いで表の中から「赤い」という語を探し出して、それに対応している色の見本を見出す。それから、商人は基数の系列——これを彼がそらんじていると仮定する——を「五」という語にまで口に出し、それぞれの数を口に出すたびに、見本と同じ色を持ったリングを一つずつ、引き出しからとり出す。——このように、あるいは、これと似た仕方では、人は語を操作する。——しかし、この商人は、どこでどのようにして〈赤い〉という語を探し出し、〈五つ〉という語で何をやりはじめたらいいのかを、どうして知っているのだろうか。——いや、私は、私の述べた通りに商人が振る舞うと仮定しているのである。「物事の」説明はどこかで終わる。——しかし、「五つ」という語の意味は何であるのか。——そのようなことは、ここでは全く問題になつていなかった。どのように「五つ」という語が使われるか、ということだけが問題だったのである。

つまり、この節において登場する「赤いリングを五個買う」という行動に含まれている言語活動について述べられた考察からも理解できるように、ウイトゲンシュタインは、言語使用の際の規則に注目し、規則による説明はいずれかの地点で終わると捉えており、言語活動の外に規則を具体化することを否定する見解をとっていたとされる。

このようなウイトゲンシュタインの見解に基づいて、「アスペクト旨」についての考察を捉えなおすとすれば、アスペクト

盲の人は、野矢氏の捉えたように「規範性」を欠いていると言  
い得るだろうか。

例えば、アスペクト盲の人に、ウサギ・アヒルの図が示され、  
何が見えるか問われるとき、「ウサギを見ている」（あるいは  
「アヒルを見ている」）と答えると考えられるが、そのこと自体  
は、われわれがウサギ・アヒルの図を初めて見たときの返答と  
相違ないと考えられる。アスペクト盲の人が「規範性」を失っ  
ているという解釈が生じるのは、ここで、現在見ているのとは  
別の見方があることを提示された場合に、アスペクト盲でない  
人は両方の見方が一つの図柄についての二つの見え方であると  
理解することが可能であるのに対し、アスペクト盲の人には、  
たとえ別の見方を提示することができたとしても、その人がそ  
れをもう一つの見方と関係させ一つの図柄に帰属させることが  
できないという問題が生じると考えられるからである。そし  
て、もしここでアスペクト盲の人は、規範性が欠けているとい  
う見解によらないとすれば、アスペクト盲の人の知覚のあり方  
とそうでない人の知覚のあり方とに区別が失われ、アスペクト  
盲の人も、そうでない人も、アヒル・ウサギの図について、「ウ  
サギを見る」と「アヒルを見る」という体験をし、同様にそれ  
が一つの図について結び付けられる見方であるということを通  
解しないままであるということになる。われわれは通常自分た  
ちがアスペクト盲の人とは異なる見方をしていると捉えている  
ため、ここで示されたあり方は一見奇妙なものに感じられるか

もしれない。しかし、実際には、ここで示されているのは、大  
森の見解において示されていた、空想しているものについて  
も、実在している物についてと同様われわれは「立ち現われ」  
を持つのであり、「立ち現われ」においては空想しているもの  
は、実在している物と区別されないという見方を基にした知覚  
のあり方であると言いうことができる。

アスペクト盲の人とそうでない人の知覚のあり方について、  
「規範性」の有無を基準とした区別を行う解釈に対して、大森  
の見解に沿って、われわれが陥ってしまったている対象と表象の  
二元論的構図の特徴を明らかにすること、さらに、「立ち現わ  
れ」においては空想しているものは、実在しているものと区別  
されないという指摘を参照することで、異なる解釈の可能性を  
示すことが可能である。なぜなら、これらのことは、われわれ  
の「規範性」のありかについて疑問を呈していると捉えられる  
からである。このことよって、アスペクト盲の人は「規範性」  
を欠いているというものとは異なる解釈を示すことができた  
と捉え、本稿の結論としたい。

(1) 大森荘蔵「ことだま論」『大森荘蔵著作集 第四巻』岩波書店、一  
九九九年、一一六―一一七頁。

(2) 同、一一八頁。

(3) 独語や実際に相手に向かって発声されるのではない書き言葉も存  
在するが、「ことだま論」において、大森荘蔵は、言葉の働きを見て  
とるために、まず聞き手に向かって語られる状況に注目している（同

- 前、一五頁)。
- (4) 同、一七頁。
- (5) 同、一三〇—一三二頁。
- (6) 同、一三二頁。
- (7) 例をあげるなら、映画のフィルムが網膜に与える像は動画となっているが、実際にはわれわれはそれがコマずつ送られたものであると知っており、ここで網膜に与えられる像と実際の対象の姿をわれわれは区別していると言うことができる。同様に、哲学者は、ここで知覚として現われていることと、映画の場合と違ってわれわれが知っているとは限らないが、それとは区別される、物の実際の姿である「対象」を、区別しようとしている、と考えられる。
- (8) 大森荘蔵、前掲書、一三三頁。
- (9) 同。
- (10) 野矢茂樹「規則とアスペクト」『哲学探究』第II部からの展開『北海道大学文学部紀要』第三六卷第二号、北海道大学文学研究科、一九八八年、九六頁。
- (11) Hans-Johann Glock, *A Wittgenstein Dictionary*, Oxford, Malden: Blackwell, 1996, p.36.
- (12) *Ibid.*, p.37.
- (13) Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, Oxford, Malden: Blackwell, 1998, p.213. ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン『哲学探究』藤本隆志訳『ウィットゲンシュタイン全集8』大修館書店、一九七六年、四二五頁。
- (14) *Ibid.*, p.214. 同、四二七頁。
- (15) 野矢茂樹、前掲論文、九六頁。
- (16) 同、一〇四頁。
- (17) 言語使用の場面においてアスペクト的な体験を欠いているこの種の人、ウィットゲンシュタインの他の著作『心理学の哲学』に登場する用語を用いて、「意味盲」と呼ばれている。
- (18) ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン『心理学の哲学1』佐藤徹

- 郎訳『ウィットゲンシュタイン全集・補巻1』、大修館書店、一九八五年、八四頁。
- (19) 野矢茂樹、前掲論文、九九頁。
- (20) 同、一〇三頁。
- (21) 同、九八頁。
- (22) 同、一〇二頁。
- (23) 同、一〇二頁。
- (24) Ludwig Wittgenstein, *op. cit.*, p.212. ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン『哲学探究』四三三頁。
- (25) 野矢茂樹、前掲論文、一〇四頁。
- (26) 同。
- (27) 同、一〇八頁。
- (28) 同、一〇六頁。
- (29) 同。
- (30) 同、一〇九頁。
- (31) 同。
- (32) 同、一一四—一一五頁。
- (33) 同、一一五頁。
- (34) 同。
- (35) 同、一一六頁。
- (36) Ludwig Wittgenstein, *op. cit.*, p.201. ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン『哲学探究』四〇〇頁。
- (37) 大森荘蔵、前掲書、一三五—一三六頁。
- (38) Ludwig Wittgenstein, *op. cit.*, pp.2-3. ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン『哲学探究』一五一—一六頁。
- (39) 同。
- (いしだ・えり、哲学、武蔵野大学客員研究員)